

報告会では、各分科会のコーディネーターがそれぞれ議論された内容を報告し、豊橋市長がサミット宣言を行った。また、飯田市長が、次回開催地域を代表してあいさつをした。

### ■ 「道」分科会

コーディネーター 豊橋市長 佐原光一

「道」分科会では、まず、飯田市から三遠南信自動車道の整備状況と効果について報告をいただくとともに、三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路の建設促進について、行政、経済界、議会それぞれが組織する期成同盟会や協議会の活動状況の報告をいただいた。その後、三遠南信ビジョンに掲げる重点プロジェクトの実現に向けて、前回サミットの議論を踏まえ、地域基盤の活用により、地域交流やまちづくりにどのような効果を期待するか、また、その実現に向けて、三遠南信地域が一体となってどのような活動を行っていくべきかなどについて議論を進めた。



まず、三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路については、この地域の基幹道路として多くの参加者から様々な意見をいただいた。その中で、道路整備は、点から線につながってこそ道としての機能を発揮するものであり、国直轄となっていない現道活用区間についても、どうあるべきか考えるべきだとの意見があった。また、三遠南信自動車道は、飯田から伊勢までつながって、この地域の骨格を形成するものであり、また、三遠南信の西に位置する蒲郡から浜松につながる名豊道路も、三河港などを活用した物流や人の交流を促し、地域の活性化につながるものとして重要であるといった意見が出された。

次に、リニア中央新幹線の早期建設と飯田駅の設置については、三遠南信道路の実現とともに開業を目指していきたいが、政権交代による国の社会資本整備の方針の変化や財政難など、一段と厳しさを増している状況下にあるため、重点プロジェクトの実現に向けては、今後、国や国会議員に理解してもらうため、現場を見てもらう機会を設けるべきだとの意見があった。また、政策提言していくためにも農業、工業など、この地域の高いポテンシャルを具体的なデータなどで示すとともに、地域、そして住民の元気な姿をアピールすべきであるといった意見が出された。

また、生活道路がきちんと残されていくためにも幹線道路の整備が重要で、地域において頑張っている人たちの声も大きな力になるとの意見があった。

総括として、アドバイザーの大貝教授からは、これらの意見を踏まえ、中山間地域の日常サービス施設までの車でのアクセス時間などを調査しており、こうした点で、この地域に側面から協力していきたいとアドバイスをいただいた。

## ■ 「技」分科会

コーディネーター 愛知大学三遠南信地域連携センター長 岩崎正弥 様



「技」の分科会では、4つの重点プロジェクトに重心を置いて議論を進めた。この1年間に、このプロジェクトがどのように動いたかということに参加者の方々から報告をいただいた。そして、今後の取り組みについて活発な議論がなされた。ここでは5点にまとめて報告をさせていただく。

まず、第1点目、地域資源を発掘、活用していくことが大切である。産学官連携が進まない現状があるが、その場合にはコーディネーターを入れることが重要

であるという意見が出された。

第2点目、情報交換の必要性、重要性である。異業種交流をすることで、新たなイノベーションを期待する。これを今後とも促進をしていかなければいけないという意見である。

第3点目、情報発信の重要性である。三遠南信地域は、一步この地域の外に出るとほとんど知られていない状況である。よって、三遠南信地域の見せ方を今後工夫していく必要があり、わかりやすいキャッチコピーを作る必要がある。ものづくりではこの地域は非常に有名であるが、それを物語るキャッチコピーをつくり、全国あるいは海外に向けて発信していくというものである。

第4点目、農商工連携、産学官連携に関して、既にこの地域には国から補助を受けた形の拠点が立ち上がっている。これをこの地域全体に広げていく必要性があるというものである。

最後、第5点目、地域連携ではなくて三遠南信地域の融合ということに向けて、今後さらなる発展を願っていくことが必要ではないかということを確認した。

## ■ 「風土」分科会

コーディネーター 市民団体連携委員会委員長 原田敏之 様

前半は、この三遠南信というエリアを考えた上での連携の事業というものをどう展開していくのか、後半は、重点プロジェクトにどのように取り組んでいくべきかについて議論した。

前半の連携事業であるが、まず、祭り街道という事業を事例に議論を発展させた。その中では、住民の力と行政の力をどのように組み合わせ、また役割分担をし、バランスを図っていくのが大変重要であると改めて確認をした。特に問題になったのは、「限界集落」

という言葉が出る状況の中、地域の伝統芸能等を次の世代にどのように継承していくかということである。連携や様々な交流を通じて、この課題を何とか克服していく道があるのではないかと話を進めさせていただいた。その中で、ふるさと歌舞伎交流事業などを通じて、他の地域の人たちからパワーをもらい、これは大事な機会であるとのご報告をいただいている。

その一方で、その地域の本来の姿というものを忘れてはならないとの意見もあった。信仰にルーツを持つ祭りでは、本来大切にしてきたものを軽々に扱ってはならないのではないかと話した。



大事に掘り下げていくことで、また新しい別の可能性というものも出るのではないかとということであった。いずれにしても、これを継承していくということについて、いろいろな知恵をもっともつと出し合っていくということが必要である。

後半の重点プロジェクトについては、もう既に取り組んでいるものがあるということで、できるところからどんどん進めていくということが可能ではないかということであった。例えば、風景街道づくりについては、伊那街道や秋葉街道など、もっと情報を整理し、可能性をつなげていくことによって、いろいろな物語をもつて膨らませていくことができる。また、鉄道を利用する方法もある。これについては、世界から見たらうらやましがられるような、自信の持てる財産がいっぱいあるのだというご指摘もいただいている。

また、海外への観光情報発信については、例えば、東栄町を中心に、花祭りを世界遺産に登録していこうという動きが具体的に進められている。

三遠南信アンテナショップの開設については、町を挙げてアンテナショップを展開していくという試みをしている事例も既にあるので、これを三遠南信全体の取り組みの中で位置づけて、展開していくことが可能ではないかということである。

したがって、重点プロジェクトについては、優先順位を付けていくという想定であったが、実はできることが身近にたくさんあり、積極的にその具体化をしていくことから道が出てくるのだという形に議論が整理されたかと思う。

## ■ 「山・住」合同分科会

コーディネーター 社団法人東三河地域研究センター常務理事 戸田敏行 様



「山・住」は2つの課題がある。1点は、上下流域で定住を進めるということ。もう1点は、医療、防災等を含めた安心・安全を確保するということである。

冒頭に飯田市の牧野市長から定住自立圏構想の発表をいただき、三遠南信は高度な、より広い機能を持った定住自立圏を目指すのだというお話をいただいた。それに沿って議論が進められた。

まず、行政、経済界、住民の視点から現状の確認をした。交流が増大しているが定住に結びついていないという現状や、ある地区では、転入する人を選ぶことで、コミュニティ形成に配慮しているが、ある地区では、廃村に自由に転入をさせているとの話があった。

まとめといたしましては、次の3点とさせていただきたい。

1点目は、交流連携の促進である。その1つは、広い三遠南信の中でそれぞれの情報が得られない状況にあることである。これについては、広報紙、ケーブルテレビ、新聞による連携を図る、あるいは、NPOが発行している雑誌「Am i」を広めることが問題解消になるということであった。それから、仲介がある。林間学校の開校、飯田市などのUターンのモデル的人材紹介、上下流域で結婚相手の紹介、袋井市で使用する木質ペレットを飯田市から調達するなどの仲介という交流の促進が1点である。

2点目は、総合定住政策の必要性である。定住を促進していくためには、施策がバラバラではできないため、働く場、企業の活動や県境を越える緊急医療といった各地の機能を決めて、そこから定住を図っていくということである。

3点目は、SENAの役割であるが、1点目、2点目の政策を進めていく。特に、2点目の定住政策を進めていくには、県境を越えてデータを集め政策を立てることが必要である。これはSENAの専権的な要件であり、構想から計画への政策実施機関としての期待が非常に高いということである。県境を越える政策主体はなかなかつくりにくい。しかし、基調講演にもあったように、同様の動きも全国に出てきている。県境を越えた政策を決めることができる、あるいは、補助金を直接的に受けられる、そのような県境を越える政策主体となれることが、SENAから国に要請していくべき提案事項ではないかというのが私の感想である。

以上、現状と3点に取りまとめられたということで、「山・住」合同分科会の報告とさせていただきます。

## サミット宣言 豊橋市長 佐原光一

三遠南信地域は、圏域人口 230 万を擁し、「塩の道」を通じた歴史的、文化的な交流や豊かな自然環境を背景として、都道府県に匹敵する経済規模を誇るなど高いポテンシャルを有する地域です。

また、国土軸を形成する新東名高速道路や、太平洋地域と日本海地域を結び圏域の南北交通の基軸となる三遠南信自動車道の整備が進められ、さらには圏域北部の玄関口となるリニア中央新幹線飯田駅の設置が検討されるなど、将来に向けて更なる発展の可能性を秘めています。

こうしたなか、平成 20 年 3 月には、「三遠南信地域連携ビジョン」をサミットでの合意のもと策定し、目指すべき地域像を「三遠南信 250 万流域都市圏」として、各主体が活動の方向性を一致させ、交流から連携への動きを加速させることとし、平成 20 年 11 月には、「三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）」を設置し、事務局を開設するなど、圏域の政策調整機能を整備してまいりました。

今回のサミットは、SENAが主催する初めてのサミットであり、「日本の県境連携モデルの構築」というテーマのもと、「道」「技」「風土」「山・住」の各分科会で、活発な意見交換、議論が進められてまいりましたが、こうした結果を踏まえ、私たち三遠南信地域は、次の事項に重点を置き、日本の県境連携を先導するにふさわしい圏域活動を進めてまいります。

- 1 三遠南信 250 万流域都市圏の骨格となる三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路の早期整備、三遠伊勢連絡道路構想の実現、さらには新たな東西軸を形成するリニア中央新幹線飯田駅の設置に向けて、「三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）」を中心に、地域一丸となって提案活動を進めます。
- 2 新産業の創出と既存産業の活力増進に向けて、知的・産業クラスターの形成など県境を越えた産学官連携による農商工連携や医工連携の取り組みを進めるとともに、県境を越えた大学・研究機関の連携を通じて次代を担う人材の育成を進めます。
- 3 三遠南信地域の地域資源の価値向上のため、塩の道エコミュージアムを構成する歴史・文化的な地域資源や地域の特産品などの情報収集に取り組み、情報発信の機会を創出するとともに、地域資源のネットワーク化やブランド化を進めます。
- 4 広域連携による生活環境の向上を目指して、住民の命を守る医療や防災の連携、美術館や博物館など公共施設の相互利用を進めます。また、中山間地域における定住促進に向けて、都市部との二地域居住など流域定住推進モデルの形成を進めます。

これらの取り組みを、ここに集うすべての主体が確認し、連携から融合に向けて、第 17 回三遠南信サミット 2009 in 東三河のサミット宣言といたします。

平成 21 年 11 月 13 日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議  
三遠南信サミット 2009 in 東三河



○ 次回開催地域あいさつ

飯田市長 牧野光朗



ただいまご紹介いただきました飯田市長の牧野光朗でございます。

次年度開催地であります南信州地域を代表して、一言ごあいさつを申し上げます。

三遠南信サミット2009 in 東三河が所期の成果を上げて、本当に多くの皆様方のご参加のもと、盛大に開催され、無事閉幕の運びとなりましたこと、まずもってお祝いを申し上げる次第であります。これも佐原豊橋市長さん初め、東三河地域の皆さん方、関係されました皆様方の大変なご尽力によるものと深く感謝を申し上げます。

さて、この地域を取り巻く環境というものは、大変大きく変化をしてきているところであります。先ほども報告がありましたように、本日の議論を振り返ってみますと、この私どもの三遠南信地域におきましては、そうした環境の変化をきちんと踏まえた形で変わっていく、そして自立していく、そういった可能性を持った地域であるということを改めて感じたところであります。来年度はサミット6巡目の区切りとなるわけであり、18回目を迎えるわけであり、この三遠南信地域連携ビジョンの具体化に向けた更なる論議を重ねる場にできればと思っております。そのためには、SENA事務局の機能をさらに強化していく必要も感じた本日でありました。

先ほど、連携から融合に向けてという大変力強いサミット宣言があったわけであり、我々は、それでは何から具体的な融合に向けての動きがで

きるか、これから、本日ただいまから、さらに検討していく必要があると思っております。具体的な検討が必要であります。

例えば、地域政策の融合という観点から見て、どんな政策をこの圏域全体で共有して融合してやっていけるか、地域の医療政策一つとってみましても、例えば、浜松市さんが持っているヘリコプターを圏域全体で使うことは可能なのだろうか、あるいは、この圏域全体で産科制限をしている地域というものを解消していくことが我々の地域全体の経験からできるのだろうか、あるいは、環境政策におきまして、先ほどペレットストーブの話も出ましたが、そうしたペレットの圏域内の流通をもっと広げていくことができるのだろうか、あるいは、私どもの地域で開発しましたLEDの防犯灯であります、こうしたものを環境政策の中に、例えば、圏域全体で取り入れていくことができるのだろうか、そうしたさまざまな具体的な提案というものを一つ一つこれから検討していく時期に入っていると私は思うわけであり、

次期開催地の南信州地域は、今年、構成いたします1市3町11村が一体となりまして、定住自立圏構想を全国に先駆けて取り組んできているところでございます。先ほど、戸田様からも話がありましたが、こうした定住自立圏というものは、さらに、この三遠南信圏域全体に広がってこそ意味があると私は思っております。基本的な生活機能を有するこの定住圏が、それぞれ相補い合いながら高次の定住自立圏を形成していく、日本でそうしたことができるのは、この三遠南信圏域が恐らく一番最初だろうと私は思っているところでございます。

連携から融合に向けて具体的にどんなことができるのか、次回、飯田で開催するまでに検討を重ねていくことができればということをお願いいたしまして、私からのあいさつとさせていただきます。

次回、飯田で是非また議論しましょう。よろしくお願ひします。